

『若きパルク』訳詩史稿（Ⅰ）

—— 第1行～第101行 ——

Translated *La Jeune Parque* into Japanese (Ⅰ)

—— 1.1 — 1.101 ——

辻 憲 男

TSUJI Norio

要旨：ヴァレリーの詩篇『若きパルク』*La Jeune Parque* (1917年) の翻訳史のための覚え書き。菱山修三の初訳 (1942年) 以後、田辺元、矢内原伊作・原亨吉、鈴木信太郎、平井啓之、井沢義雄、中井久夫 (1995年) に至る半世紀の、七度の諸家の訳文を行を逐って比較対照した。紙幅の都合により四部に分け、この (Ⅰ) は全512行のうちの第101行までを印行する。

キーワード：『若きパルク』、ヴァレリー、訳詩

かつて井沢義雄は書いた、「詩の翻譯が不可能であるという件については、だれしも異見はない。詩作品とは、実現された具体的なものそれ自身としての形であり、個であって、異邦の言語はもとより、そのおなじ国語をもってしても置換不能のものである。置換不能性こそ詩の本質だといっていい。しかし、置換不能性という原理において実現している詩的状态、いいかえればこの不可能の限界にむかって、置換の工夫が無限にあがいてみることは可能である」云々と (『ヴァレリイ詩集』解説)。これは詩の翻訳のみならず、文学作品を解釈する場合に一般的に当てはまる問題である。たとえ同じ時代の同じ言語であっても、意味の重層や外延や、また作者の語彙や文体の表現性などは、厳密に言えば「不可能」の領域に涉るところがある。詩の翻訳において、まして日本古語への置換の場合は尚更交雑した困難が予想されよう。ことに難解な『若きパルク』の場合を観察することにより、この間の事情を探ってみようというのが本稿の目的である。

詩本文の分節は、下記の鈴木信太郎訳注『ヴァレリー全集』に引く、ヴァレリー自身の〔一〕～〔十五〕の文段区分に従った。便宜により、プレイヤード版原詩の2行または1行ごとに掲出し、その訳文を時代順に並列対照させた。それゆえ切れ目のない訳文が次行以下にわたり、しばしば相前後する箇所がある。なお紙幅の都合上四部に分け、この (Ⅰ) では〔四〕第101行までを印行することとした。

〔一〕第1～37行、〔二〕第38～49行、〔三〕第50～96行、〔四〕第97～101行、〔五〕第102～148行、〔六〕第148～172行、〔七〕第173～189行、〔八〕第190～208行、〔九〕第209～324行、〔十〕第325～347行、〔十一〕第348～360行、〔十二〕第361～380行、〔十三〕第381～424行、〔十四〕第425～464行、〔十五〕第465～512行。

1. 菱山修三『若きパルク』昭和十七年。注なく、訳文のみ。
2. 田辺元『ヴァレリイの芸術哲学』第三章、昭和二十六年。論文中に「 」をつけて抄訳引用した部分。後に『田辺元全集』第十三巻に収めた。
3. 矢内原伊作・原亨吉訳、アラン注釈『若きパルク』、昭和二十九年。訳者による原詩の「概要」の全文。脚注あり。
4. 鈴木信太郎「若きパルク」、現代世界文学全集『若きパルク・我がファウスト』昭和三十年。脚注あり。後の改訂版に『ヴァレリー全集』第1巻、岩波文庫『ヴァレリー詩集』などがある。引用は改訂版によった。

5. 平井啓之「若いパルク」、『世界名詩集大成4』昭和三十七年。後注あり。後の改訂訳『世界名詩集17』昭和四十二年、『世界詩人全集10』昭和四十四年では脚注。引用は全集版によった。
6. 井沢義雄「若きパルク」、『ヴァレリイ詩集』昭和三十九年。訳文のみ。後の改訂訳『ヴァレリーの詩 若きパルク』昭和四十八年には詳しい注釈がある。引用は改訂訳によった。
7. 中井久夫『若きパルク/魅惑』一九九五年。注釈あり。引用は二〇〇三年の改訂普及版によった。

〔一〕

1-2

Qui pleure là, sinon le vent simple, à cette heure /Seule, avec diamants extrêmes?... Mais qui pleure,
 菱山：其処で誰が泣明してゐるのか、風でもないとする、／単調に、ただ極限のかすかな^{いはて}金剛石と共にある
 この時に？……

田辺：「一すぢの風の音ならで誰がいま、ただ一人^{いはて}星のきらめきのみ残るこの暁に、泣くものぞ……
 矢内原：ただの風ではないのなら、そこで泣いてゐるのは誰なのか、^{いはて}金剛石と私のみあるこの時に？
 …… だが泣いてゐるのは誰なのか、

鈴木：泣くは誰 彼処に、一陣の風にはあらで、この黎明／ただひとり、窮極の金剛石と共に在る時…… さ
 はれ泣くは誰か、

平井：そこで泣くのは誰、ただ風でないなら、この時刻に／ひとり暁空のはてのダイヤと共に……でも一体誰
 が泣くの、

井沢：誰たが泣くや、ただ空わたる風ならで、今^{ほしほし}いはてに／金剛石のひとり瞬くこの^{とき}時刻に？……さはれ誰
 が泣く、

中井：過ぎ行く一筋の風ならで誰が泣くのか、／^{ほしほし}いはての金剛石と共に独りある、この^{ひととき}一刻に？……

3

Si proche de moi-même au moment de pleurer?

菱山：しかも誰が泣いてゐるのか、泣いてゐる時私自身にこれ程真近く？

田辺：泣く瞬間に、われ自身にかくもま近く、誰か泣く」

矢内原：今にも泣きだしさうな私自身のこんなにもすぐそばで？

鈴木：かくもわが身の間近くに、われの泣かむとする時に。

平井：こんなにも私の身近で泣き出しそうなのひとときに。

井沢：まさに泣かんわれ自らにかくまでに近くせまりて？

中井：だが誰が泣くのか、その泣く時にかくもわが身に近く？

4-5

Cette main, sur mes traits qu'elle rêve effleurer, /Distraitement docile à quelque fin profonde,

菱山：私の^{かんばせ}顔容にかすかに触れることを夢みながら、この手は、／何か深い^{めあて}目的にこころなく従ひながら、

田辺：「この手はなんらか深き目的に心ならずも従ひて、そが触ると夢想するわが顔貌に、

矢内原：この手は私の顔に触れることを夢みながら、その顔の上で或る深い目的に心なく従つて待つてゐる、

鈴木：わが顔に将に触れむと夢みるか、何かは知らぬ／深刻なる心の意図に 茫然と従ふこの手は、

平井：この手は、夢見心地でわが顔をまさぐりながら、／放心のうちにもある深いねがいのままに、

井沢：いかにこの手はわが顔に触るかと夢見ごちに、／なにやら^{ねがひ}深き目的に茫然と靡くがごとく、

中井：この手——、手は待つ、わが顔に触れやうと夢みつつ、／深いはからひにわれ知らず従って、

6-7

Attend de ma faiblesse une larme qui fonde, /Et que de mes destins lentement divisé,

菱山：私の弱味に対して期待する、根拠を置く涙を。／また、かずかずの私の因果からしづかに分れ、

田辺：わが弱さの自覚によりわれに存在の根拠を確立する涙の流るるを待ち、また数々のわが因縁より徐々に
 分たれて、

矢内原：私の弱さから溶け出る涙を。また私の諸々の運命から徐ろに分たれて、

鈴木：わが弱さより 一滴の涙の流れ出づるを待ち、／わが宿命の心身より 徐かに分離せられゆく

平井：私の弱さからあふれくる涙をまち受けている。／そして私の運命からゆっくりと離れ出て、

井沢：待つらんか、わが弱さより一滴の涙の溶けて、／さてはわが身の因果より緩やかに解け分れて

中井：わが弱さから溶け出でて一滴の涙が零れ落ちるのを、／数々のわがさだめから緩やかに分れ出て

8-9

Le plus pur en silence éclaire un cœur brisé. /La houle me murmure une ombre de reproche,

菱山：沈黙のなかにその最も純粋なものがいま草臥れ果てた内心を照し出す。／波の蜿蜒は、呵責の影を私に
囁き、

田辺：最も純粋なるものが、沈黙の裡に、破れたる胸を照らすことを期待す。」「波のうねりは非難の影をわれ
に囁き、

矢内原：その最も純粋なものが破れた心を静かに照らすのを。波は私に非難とおぼしいものを呟き、

鈴木：最も純粋なるものが、この傷心を 沈黙の中に解明ずるを待つ。／大波のうねりは 或は咎むるが如き
気色をわれに囁き、

平井：至純のものが沈静の裡に傷ついた心を照らすのをまっている。／波のうねりはそこはかとないとがめの
言葉を呟き、

井沢：至純なるもの静けくも傷心を照らし出づるを。／大波のうねりはわれに叱責の気配をささやき、

中井：最も浄らかな一筋が砕かれた心を静かに照らし出すのを。／大波は咎めるが如くに我に囁き、

10-11

Ou retire ici-bas, dans ses gorges de roche, /Comme chose déçue et bue amèrement,

菱山：或ひは此处下方に、その岩床のかずかずの咽喉のなかに、／裏切られ苦々しく呑み干したもののやうに、

田辺：或は掻き口説きと抱き緊めの音を、欺かれて苦き味を嘗めさせられし物を嚙み込む如くに、

矢内原：或はまた下の方、岩の喉もとで、裏切られたもの、苦くも飲まれたもののやうに、

鈴木：或は彼処の 岩礁の狭間の喉に、／欺かれ苦々しくも呑まれたる事物のごとく、

平井：また磯辺では、群なす岩の咽喉の奥で、／欺かれた苦い想念を呑み込むかのように、

井沢：或はここ、岩の狭間の喉もとに吐き戻すなり、／欺かれ苦にがしくも嚙まれたるものの如くに、

中井：あるひは退いて此方の岩間に咽喉を鳴らす。／欺かれ飲み込んだ苦いえずき、

12-13

Une rumeur de plainte et de resserrement... /Que fais-tu, hérissée, et cette main glacée,

菱山：次第に萎縮してゆく水の哀訴の騒音を遠ざける……／何をするのか、逆立つて、この凍て果てた手は、

田辺：ここ岩の凹みなる数々のそが咽喉部へ引き戻し消し去る。逆起ちて、汝何を為すか、この凍る手もて。

矢内原：胸をしめつける嘆きの響をひき戻す……／お前は何をしてゐるのか、髪ふりみだし、手を凍らせて？

鈴木：歎きと心を締めつくるざわめきの音を叫ぶ……／髪逆立てて、凍りたるその手を挙げて、何事を汝は為
すか。

平井：嘆きと胸ふたがる想いの余韻をひびかせている……／お前は何をしているの、髪は逆立ち、この手は凍
え、

井沢：胸しむる辛き思ひや歎かひのざわめきの音を……／汝は抑も何をなすなる、髪みだし、手を凍らせて、

中井：嘆きと胸締めつけられる思ひの音も……／え、何をしてゐるのか、毛を逆立てて、またこの凍る手は？

14-15

Et quel frémissement d'une feuille effacée /Persiste parmi vous, îles de mon sein nu?...

菱山：しかも一枚の控目な木の葉のわななきが／お前等のなかで執拗く続くことか、素裸かな私の胸の島々よ？

田辺：また散り失せし木の葉のいかなる慄へが、わが赤裸の胸の島々（乳房）なる汝等の中に残存するよ。

矢内原：また、あらはな私の胸の島々よ、お前たちの間に風にさらはれた木の葉にも似た何といふ戦きが残つ
てゐることか。

鈴木：また風に吹き散らさるる落葉の恐るるとき顫動は／全裸の胸に盛上る島と島との間に、なほ執拗にも
続くか。

平井：あらわな胸の二つの島よ、その間には、／色あせた木の葉ひとつのおののきが消えやらぬのか……

井沢：さはれまた消えゆく木の葉ひとひらの、いかなる戦ぎ／汝らのあひに残るや、あらはなる胸の島らよ？……

中井：消えた木の葉の細かな慄へがこの裸の胸の／双つの小島の間に消えやらぬではないか？……

16-17

Je scintille, liée à ce ciel inconnu... /L'immense grappe brille à ma soif de désastres.

菱山：私は煌く、この未知の空に結ばれて……／かずかずの災禍を願ふ私の渇きに、大きな葡萄の房が耀く、

田辺：われは見知らぬこの天に繋がれて光る。大なる葡萄の房が災害を欲するわれの渇きに輝くなり」

矢内原：私は燦く、知られないこの空につながれて…… はてしない葡萄の房は破局への私の渴望に輝きかける。

鈴木：燦々とわれは煌く、この未知なる天空に身を結ばれて……／災を求むるわが渇きに対し、星辰の無限の葡萄の房は輝く。

平井：私はおののききらめいている、未知の天空に結ばれて……／たわわにみのる星々は不幸への渇情に向ってかがやいている。

井沢：われは煌く、かしこ未知なる天空に身は結ばれて……／わざはひのわれが渇きに無辺なる果房はかがやく。

中井：われは燦めく、未知の大空に繋がれて……／巨大な葡萄の房が輝いて、破滅の星への渇きをそそる。

18-19

Tout-puissants étrangers, inévitables astres /Qui daignez faire luire au lointain temporel

菱山：遠方の現世へ／何か純粋な超自然なものを／照出してくれる全能の異邦人、避けがたい遊星等よ、

田辺：「遠き未来まで、不思議なる清澄超自然の光を発せしむることを肯んずる全能の外来者、不可避なる星よ、

矢内原：時のかなたに何かは知らぬ純粋で超自然のものを輝かせてくれる全能の異邦人、避けがたい星々よ、

鈴木：その運命を避け難き、全能の異邦人たる天の星々、／遥かに離れし現在の世に 何かは知らぬ純粋の

平井：全能の異境のもの、避けることを許さない星たちよ、／はるかな現し世までもあえて輝かせるのか、

井沢：全能の異邦人らよ、避けがたき運命の星ら、／時の世のこの遠方になにか知らね自然を越えて

中井：限りない力の外国びと、避けられないさだめの星、／時空を越えない此方ではあるが、遥かなうちにも遥かにあって

20-21

Je ne sais quoi de pur et de surnaturel; /Vous qui dans les mortels plongez jusques aux larmes

菱山：この無上の光芒を、この無敵の武器を、／その永劫の、かずかずの飛躍を、／人間共のなか、涙のうちにまで投じるお前等、

田辺：この無上の光を、この不敗の武器を、すなはち汝の永遠性の飛躍を、人間の内部にまで沈潜せしめて涙を流さしむる汝、

矢内原：人間たちの中に、涙を催させるまでに、この至高の輝き、この不敗の武器、またその永遠の閃光を突き入れる御身たち、

鈴木：自然を超越せるものを 光彩陸離と輝かす星よ、／死すべき儚き人間の中に、涙をさそふまでに、

平井：言うに言われぬその純粋で超自然な光を。／死すべき人の子の涕の奥処にまでも、

井沢：純粋のもの煌らかに輝かせきたる汝よ、／人の子の心のうちに、涙をば催すまでに、

中井：自然を越えた浄らかな光を敢へて放つ星。／きみたちの無上の輝きの無敵の武器の

22-23

Ces souverains éclats, ces invincibles armes, /Et les élancements de votre éternité,

鈴木：これらの至高の光芒を、これらの不敗の武器を、また／汝らの永遠性の照射をも、敢て投げ入る汝らよ、

平井：そのこよないかがやき、抗いがたい光の征矢、／また永遠性の放射を投入するお前たち。

井沢：至高なるこの光輝を、うち取りえぬこの武器を、／さてはまた汝が永遠の放射を投ずる汝よ、

中井：永遠の光の槍に貫かれて、／死すべき人の子の心は涙を漏らす。

24-25

Je suis seule avec vous, tremblante, ayant quitté /Ma couche; et sur l'écueil mordu par la merveille,

菱山：私はそんなお前等とゐるだけだ、わななきながら、私の臥床を離れたので。／そして奇蹟に噛まれた暗礁の上で、

田辺：その汝と伴ひてわれは、ただ独りわが臥床を棄ててをのく。しかしてわれは怪物（すなはち蛇）に噛まる暗礁の上にあつて、

矢内原：臥床を離れ、わなないてゐる私と共にあるのはただ御身たちだけだ。そして、不思議なものに噛まれるこの岩の上で、

鈴木：われ ただ孤り、汝らと、臥床を離れて、慥きつつ、／俱に在り。しかも驚異に噛まれたる荒磯の巖に立ちて、

平井：私はお前たちと孤りいる、慥えながら、臥床を離れきて。／そして自然の驚異にさいなまれた岩礁の上に、

井沢：われははや臥床はなれて、顫へつつ、ただ汝とのみ／ここに在り。驚異のものに噛まるこの岩礁のうへ、

中井：唯一人、きみたちと共に、臥し床を離れ、慥へつつ、／波のふしぎな歯形の残る岩の上でわが心に問ふ、

26-27

J'interroge mon cœur quelle douleur l'éveille, /Qel crimme par moi-même ou sur moi consommé?...

菱山：私は自分の内心を審問する、いかなる苦痛が私を眼覚すのか／いかなる罪が己が身によつて或ひは己が上に成就されるのか？

田辺：いかなる悲哀にわが心情を呼び醒まされしか、わが犯せる罪、またわが蒙れる罪のいかなるものが、われを呼び醒ませしかをわが胸に問ふ、

矢内原：私は心に問ひかける、どんな苦痛が心を覚ますのか、私自身の犯したどんな罪が、或は私の上に犯されたどんな罪が私の心を覚ますのか……

鈴木：われ わが心に審問す、如何なる苦悩がわが心を目醒したるか、／われに依り或はわが身に犯されし如何なる罪が目醒すか……

平井：われとわが心に問うてみる、どのような苦しみにおどろかされ、／どのような罪がわれとわが手でわが身の上に犯されたのかと……

井沢：われはわが心にぞ問ふ、いかならん悩みに覚むるや、／われにより、はたわが上に、犯されしいかなる罪に？……

中井：いかなる痛みが心を目覚めさせたのか？／わが咎ゆゑか、この身に加へられた罪？……

28-29

... Ou si le mal me suit d'un songe refermé, /Quand (au velours du souffle envolé l'or des lampes)

菱山：或ひは、私が顫顫を頑丈な腕でかこみ、／長い間私の魂から光の射して来るのを待つてゐる時、

田辺：「或は息吹の柔き風に燈光消えて、われわが肉厚き腕もてわが顫顫を圍み、久しくわが魂の光明を待ちたるとき、

矢内原：それとも閉ざされた夢のあの苦しみが、今もなほ私を追ひかけてくるのか、（息の天鵞絨にランプの黄金は飛び去り）

鈴木：……或は夢に閉ち籠められし罪悪が なほ追ひ纏はるか、／今（群星の燈火の金色は 吹く天鵞絨の微風に消えて）

平井：……また閉ざされた夢の罪業が私を追うのかと、／（灯の金色はビロードのようなわが息吹に消えて）

井沢：……或はまた閉ちて結びし夢の悪われを追ひ来るや、／さなり、（燈のこがねの光びろうどの吐息に消えて）

中井：あるひは掛け金を掛けたはづの嘗ての夢から悪寒が追ひかけてくるのか？／あの時（灯火の黄金の輝きは天鵞絨の吐息に消えて）

30-31

J'ai de mes bras épais environné mes tempes, /Et longtemps de mon âme attendu les éclairs?

菱山：（かずかずの燈火の^{きん}金色を過ぎてゆく息吹の^{びろうど}天鷲絨に）／邪悪が、閉塞された一個の夢想で、私に従ふのかどうか？

矢内原：私が私の豊かな腕で顫顫をがかへ、長い間私の魂の光を待つてゐた時のあの苦しみが？

鈴木：わがふくよかなる双腕を組み、顫顫を抱き擁へ、／わが靈魂の閃光の輝きを長々と待ち居し時。

平井：私がゆたかな双の腕でこめかみをかかえて、／わが魂の閃きをまち受けていたときに。

井沢：われ厚き双の腕にわれとわが顫顫いだき、／久しくもわが魂の^{ひらめき}閃光を待ちゐしときに？

中井：ふくよかな双つの腕にこめかみを裹みながら、／魂の光の閃きを延々と待ったあの時の、これは名残りなのか？

32-33

Toute? Mais toute à moi, maîtresse de mes chairs, /Durcissant d'un frisson leur étrange étendue,

菱山：すべてのもの！ なほ私にあるすべてのもの、私の生身の女主人よ、／身慄ひして奇怪な全身長を硬くしながら、

田辺：終結せられたる夢の中より邪悪がわれを追跡し来りたるかと問ふ。一と震ひもて奇怪なる肉の全延長を硬化し、

矢内原：すつかり！ さうだ、すつかり私に即して、私の肉の主となり、その奇異な抔りをわななきで打ちかためながら、

鈴木：あらゆるわれ。まさに己に属するすべて、わが肉体の主なる女、／戦慄により肉体のわれにも解かぬ広袤を硬直させて、

平井：すべてか、いや私のものなるすべて、わが肉の主か、／わが肉のふしぎなひろごりを硬ばらせて一すじの戦慄はつたい、

井沢：残りなく？ 残りなくわれ、わが肉の^{あるじ}主となりて、／戦慄ふるへひとつかれが奇異なる延長ひろがり硬ばらせつつ、

中井：全てと？ だが、全てはわがため、私はわが数々の身体^{あるじ}の余す所ない主であった。／身体^{あるじ}の他人事の如き広がりを一振ひに硬くさせ、

34-35

Et dans mes doux liens, à mon sang suspendue, /Je me voyais me voir, sinueuse, et dorais

菱山：私の優しい絆のなかに、流れも停まった私の血汐に、／私は、うねりながら、私があらはれるのを、親しく見てゐた、

田辺：全体とや、わが肉の主、われに属する全体、われは、わが柔き繫縛の中にわが血の循環を遮り止められて、そを見たり。そのわれを見るわれをわれは見たり、紆余曲廻うねりうねりて。

矢内原：また私のやはらかな絆の中で私の血にとりすがつて、私はうねりながら私を見る私を見、まなざしから

鈴木：わが快き束縛の中に、血潮の流にも 宙に吊され、／うねうねと、われは 己を見るわれを見て、視線より

平井：甘美な肉の絆のうちに、血行もとどめられて、／私はわが身を眺める私を見た、身をくねらせて、

井沢：ころよきわれが絆^{はだし}のなかにわが血につるされて、／うねうねと、われ見るわれをわれは見、わが深奥の

中井：数々の絆の心地よさの中で、おのが血に溺れて、／なまめかしくくねる私を見る私を私は見てゐた。

36

De regards en regards, mes profondes forêts.

菱山：さうして視線^{まなざし}の向き向きに、深い私の森また林を金色に塗つてゐた。

田辺：またわれは、わが心の密生せる深林を注視に注視を重ねて照らし光らせたり。

矢内原：まなざしへと、私の深い森を金色に塗つてゐた。

鈴木：視線へと残る隈なく、深奥のわが身の森を金色に彩り居たり。

平井：わが心の奥処をも、まざまざと金色に彩った。

井沢：森いくつ眼差つらねて金色にわれは塗りぬき。

中井：身体の奥深い森は見る度に悉く黄金の色を帯びた。

37

J'y suivais un serpent qui venait de me mordre.

菱山：私はそこで、私を噛んだばかりの一匹の蛇の後を追つてゐた。

田辺：そこに、われ、今しわれを噛みたるばかりの蛇を追跡せり、

矢内原：私はその森の中で私を咬んだばかりの蛇を追つてゐた。

鈴木：ここに われは、われを噛みたる一匹の夢中の蛇を追ひぬたり。

平井：私はそこにわが身を噛んだ蛇を追ってきた。

井沢：われはそこに、われを噛みたる一匹の蛇を追ひぬき。

中井：その森で私を噛んだ蛇の後を追った。

〔二〕

38-39

Quel repli dé desirs, sa traînel... Quel désordre /De trésors s'arrachant à mon avidité,

菱山：かすかすの欲望の波打つ、なんといふ襞、そのひいてゆく裳裾！……／私の烈しい欲念から遠ざかるか
すかすの宝物の、なんといふ乱雑さ！

田辺：「いかなる慾情の曲折、その揺曳なるぞ。わが貪婪より挽ぎ離さるる財宝の何たる狼藉ぞ。

矢内原：欲望の何といふ襞、その裳裾よ！……私の貪婪から逃れゆく何といふ宝の混乱、

鈴木：身を曳摺りて這ふ様は、欲望の何たるうねりぞ……貪婪を／われに与へて離れ去る 蛇身の宝の何たる
混乱、

平井：何という欲情の曲折だろう 蛇の匍う様は……／何という混乱した財宝が貪婪な私の心から立ちあらわ
れ、

井沢：匍ふさまの、この欲望の^{うねり}屈曲はや！…わが貪婪を／逃れつつ身を離^さりゆく、いかにこの宝の乱れ、

中井：欲望とは正に這ふもののくねりではないか！……／貪る私から離れながら引きずる珠は辺りに散らばる！

40

Et quelle sombre soif de la limpidité!

菱山：しかも、あの鮮明を願ふ、なんといふ不安な渴望！

田辺：光明に対する何たる暗黒の渴望ぞ。

矢内原：そしてまた透明への何といふ暗い渴望！

鈴木：また鮮明を冀ふ何たる暗き不安の渴望。

平井：また何という透徹への暗い渴きがあったことか。

井沢：さはれまた透明ねがふ、いかにこの暗き^{かわき}渴望や！

中井：だが、透明への何といふ昏いこの渴き！

41-42

Ô ruse!... A la lueur de la douleur laissée /Je me sentis connue encor plus que blessée...

菱山：おお 詭計よ！……あとに残された苦痛のかすかな光に、／私は、傷手を受け、それにもまして自己を
識別したと思ふ……

田辺：おお、詭計。後に残されたる悲哀の微光に、われは負傷よりもむしろ自覚を感知せり。

矢内原：おお詭計よ！……苦痛の仄明りに置き去りにされて、私は傷けられたと感ずるよりは寧ろ知られたと
感じた……

鈴木：おお奸策の蛇よ…… 身に残されし苦痛の微光に、／われは わが受けし傷よりなほ強く 自己認識を
感じたり……

平井：おお、惑わしよ……身に残る苦悩の微光によって、／私は傷つくよりもむしろわが^{さが}性を識ったと感じた……

井沢：おお詭計！…この身に残る^{くるしみ}苦痛の^{あかり}微光に、われは／傷うけしわれにもまして識られたるわれを覚えぬ……
 中井：図られたか！……身体の痛みの名残りのこの薄明かりの中で、／傷つき、さらに己を知られてしまったと思ふ……

43-44

Au plus traître de l'âme, une pointe me naît; /Le poison, mon poison, m'éclaire et se connaît:

菱山：私の魂の一等陰險な箇処に、いまひとつの芽が吹きそめる。／あの毒物が、私の毒物が、私を照らし出し、毒物自らの所在を明らかにする。

田辺：魂を最も裏切る尖端われに現る。毒、わが毒われを照らし、自覚に至る。

矢内原：魂の一番裏切りやすいところに一つの傷が生れ、毒、私の毒が私を照らし、自らを知る。

鈴木：靈魂を最も裏切る極点に、一尖端はわれに生る。／そは 毒なり、わが毒は、われを照して おのれを認識す。

平井：魂の裏切りのきわみに、一つの尖端がわが身に生じた。／その毒、わが身の毒は、私を照らし、自らをも識る。

井沢：^{たま}魂のいと裏切るところ、^{さき}尖ひとつわれに^あ生れ出づ。／毒、さなり、わが毒われを照らし、また自らを識る。

中井：魂のもっともきはどい急所に鋭い棘が生れた。／その毒はわが毒、私を照らし、己を知る毒、

45-46

Il colore une vierge à soi-même enlacée, /Jalouse... Mais de qui, jalouse et menacée?

菱山：毒物は彩る、我と我が身を抱き締めた一処女を／嫉妬に悩む一処女を、…しかし誰に、誰に嫉妬し、誰に脅されてゐるのか？

田辺：そはみづからに絡まれたる処女を、嫉妬の色に染む。されど誰に嫉妬した脅さるるか。

矢内原：それは嫉妬にもえて自らを抱きしめた一処女を彩る……しかし誰に嫉妬し、また脅されてゐるのか。

鈴木：そは われとわが身を抱き緊めて 嫉妬に悶ゆる一人の／処女を色彩…… さはれ 誰に妬心を燃し誰に脅さるる身か。

平井：それはわれとわが身に絡まれている処女を染めてしまう、／妬情の色に……でも一休誰を妬み誰におびえるの。

井沢：そは彩る、われとわが身を抱きしめて、嫉妬に燃ゆる／処女ひとり……されども誰に嫉妬して、身は脅ゆるや？

中井：われとわが身を掻き抱く乙女は毒によって羞らひの色を帯び、／嫉妬する……だが誰に脅え、誰に嫉妬するのか？

47

Et quel silence parle à mon seul possesseur?

菱山：そしてまた、なんといふしづけさが、唯一の私の占有者に話かけることか？

田辺：またいかなる沈黙がわれの唯一の所有主に語りかけるか。

矢内原：そしていかなる沈黙が私の唯一の所有者に語りかけるのか。

鈴木：しかも 何たる沈黙ぞ わが唯一の所有者に話しかくるは。

平井：また私に憑いている孤独な霊に、どのような沈静が語りかけるのか。

井沢：さはれこの、わが唯一の所有者にかたる^{しじま}無言は？

中井：私の唯一の持ち主に雄弁に語りかけるこの沈黙は？

48-49

Dieux! Dans ma lourde plaie une secrète sœur /Brûle, qui se préfère à l'extrême attentive.

菱山：神々よ！ 重い私の傷手のなかに、隠れた^{はらから}妹が一人、燃え上る／極度に注意深いものよりも自己をいつくしむ妹が……

田辺：神々よ、わが堪へがたき傷の内に、わがひそかなる姉妹は焦がれて、極度に注意深きものにまさりてみづからを偏愛す、」

矢内原：神々よ！ 私の重い傷の中に秘やかな一人の妹が燃えてゐる！…… 極度に注意深い者よりも自らをよしとする妹が……

鈴木：神々よ。わが重き痛手の中に 秘密の妹一人 炎ゆ……／妹は 痛みに心を奪はれし姉より己を偏愛す……

平井：神々よ、わが心の深傷の奥にひそかな妹が胸を燃やし、／想いきわまる女よりもわが身を愛そうとして
いる。

井沢：神々よ！ わが重やかなの傷のなか密けき妹は／燃ゆるなり、注意するとき女よりも己を好しと。

中井：何と！ 深い痛手の奥に秘密の妹が身を灼く。／妹は言ふ——意識の極みの姉よりも私の方がずっと良いと。

（三）

50-51

《Va! je n'ai plus besoin de ta race naïve, /Cher Serpent... Je m'enlace. être vertigineux!

菱山：さあ！ もはや愚直なお前の種族に用はない、親しい蛇よ……／私は我ど我が身を抱き締める、眼も眩いばかりの存在よ！〔以下第96行まで斜体字〕

田辺：「去れ、親しき蛇よ、われはもはや汝素朴の種族を必要とせず。めまぐるしき存在よ、

矢内原：行け！ もはや私はお前の素朴な種族を必要としない、いとしき蛇よ…… 私は私をかき抱く、眩いばかりの存在を！

鈴木：去れ、素朴なる汝の土族は はやわれの所要に非ず、／親しき蛇よ…… われはわが身を抱き締む、眩くばかりの存在よ。

平井：お行き、もはやお前のような素朴な種族に用はない、／親しい蛇……私はわれとわが身に絡みつく、
眩く存在だ。

井沢：去れ！ もはや汝が素朴の族われは必要とせず、／愛しき蛇……われはわが身をかき抱く、眩かす者よ！

中井：「行け！ あちらへ、蛇など！ もう要らぬよ、貴様のたぐひは、所詮、自然界の素朴な輩ではないか！
／蛇どのは……われはわが身を掻き抱く！ めまひしさうな生き物！

52-53

Cesse de me prêter ce mélange de nœuds /Ni ta fidélité qui me fuit et devine...

菱山：私に藉すを止めよ、あのかずかずの緋の混雑を、／また、逃亡しながら私を見抜いてゆくその忠実さを……

田辺：われはみづからをわれに絡みつく。われにこの錯雑せる結び目を貸すことをやめよ、またわれを避けながらわれの行動を予め知れる汝の忠実をわれに提供することをやめよ。

矢内原：私に貸すのをやめよ、お前のとぐろのこの混雑を、また私から逃れつつ先を見ぬくお前の忠実さを……

鈴木：されば蛇身の絡み附く纏れや、われを遁れつつも／前途を予断する蛇の執念を、われに藉すを止めよ……

平井：だから私に貸すのはお止し、そのもつれたとぐろも、／また逃れながらも私を判じているお前の執念をも……

井沢：さればわれに藉すことを止めよ、纏れあふその絡りを、／このわれを逃げつつなべて見抜きゆく汝が執拗を……

中井：絡み合ふ塊の貴様など、もうよい、／こそこそ逃げながら心を読まうとする忠勤ぶりも……

54-55

Mon âme y peut suffire, ornement de ruine! /Elle sait, sur mon ombre égarant ses tourments,

菱山：私の魂はそんなことには事足りる、破滅の扮飾よ！／私の魂は その苦痛のかずかずを私の影の上に迷はせながら、

田辺：わが魂はそれに不足を感じることなからん、没落を隠す飾よ。わが魂はそが苦悩を混乱せしむるわが幽影を超えて、

矢内原：そんなことは廃墟の飾りである私の魂で事足りる！ 私の魂は私の影の上にその苦悩を彷徨はせながら、

鈴木：廃墟の装飾と言はば言へ、わが靈魂のみにて事足れり。／靈魂は、その苦悩をわが形影の上に彷徨させながら、

平井：破滅の道具である、私の魂は孤り事足りている。／わが影の上に苦しみまどいながら、魂は知っている、

井沢：そはすべてわが魂にてことし足る、破滅の飾りよ！／魂は、わが形影^{かげ}のうへそが苦悩さまよはせつつ、
 中井：わが魂はこれでよい、廃墟の飾りで！／魂はできる、わが影の上に拷問の道具を這はせて、
 56-57

De mon sein, dans les nuits, mordre les rocs charmants; /Elle y suce longtemps le lait des rêveries...

菱山：夜毎の闇のなかで、私の乳房の、仇に優しい岩々を噛み習ひ、／長い間夢想の乳を吸ふ……

田辺：幾夜幾夜、わが胸に蠱惑の岩を噛むことを知る。魂はそこに久しく幻想の乳を吸ふなり。

矢内原：夜な夜な私の胸の美しい岩を噛むことが出来、そこに長い間夢の乳を吸ふ……

鈴木：夜ごと夜ごとに わが胸の愛らしき岩を噛むことを知り、／胸に 長くも 数々の夢想の甘き乳を吸ふ……

平井：夜半、わが胸の魅惑的な岩根を獅噛むことを。／そこに魂は久しい間夢想の乳を吸う……

井沢：夜ごとわが胸のなまめく岩を噛むすべをこそ知れ。／かれはそこに久しきあひだ夢想^{ものもひ}の乳を啜ふなり……

中井：夜ごと胸の魅惑の岩を噛ませることも。／魂は吸ふ、延々と、わが乳首から夢想の乳を……
 58-59

Laisse donc défaillir ce bras de pierreries /Qui menace d'amour mon sort spirituel...

菱山：だからして私の霊妙な天命を、恋情で危くする、この宝石の腕を／萎えるがままにまかせよ……

田辺：さらば、愛慾もてわが霊的運命を脅かす宝石の腕を、萎ゆるがままにせよ。

矢内原：それ故に、私の精神の運命を愛をもて脅す宝石のこの腕を衰へしめよ……

鈴木：されば、恋愛の情をもてわが精神の運命を／脅すこの宝玉^{きらく}の閃^{きら}らの腕に 要あらず……

平井：それゆえ愛欲によってわが精神の運命をおびやかす、／宝石にきらめくこの腕は萎えるにまかせよう……

井沢：それゆゑに、わが精神の運命を愛欲もちて／脅かすこの宝石の腕をばおとろへしめよ……

中井：だから要らない、愛などで精神の軌道を狂はさうとする朽ち縄、／宝の石の燦めく腕などは……できないではないか、蛇は、私に、
 60-61

Tu ne peux rien sur moi qui ne soit moins cruel, /Moins désirable... Apaise alors, calme ces ondes,

菱山：私の上に、無慈悲な、望ましい何事も、お前はすることが出来ぬ……／それ故平静にせよ、この波々を鎮めよ、

田辺：汝は汝に劣らず残酷なる、また慾情的なる、われに対し何事をも為す能はず。かるが故に、この浪を和げ静めよ、

矢内原：お前はこれ以上残酷なことをも、これ以上望ましいことをも私に加へることは出来ぬ…… それ故、波のやうなお前のうねりを宥め鎮めよ。

鈴木：蛇よ 汝は わが上に、惨酷ならぬ何事も 望ましからぬ何事も／為すことを得ず…… さればその波動を鎮めよ、平静にせよ、

平井：お前は何ひとつこの私に仕出かしはせぬ、もっと残酷なことも、／望ましくないことも……だから胸の潮を押ししずめて、

井沢：かほどだに酷き、はたまた望ましき、いかなることも／汝はわれになし得ず……されば、この波を宥め、静めよ、

中井：これ以上の厳しい仕打ちも、願はしい業も……／だから、このうねりを、さっさと収めてしまへ、
 62-63

Rappelle ces remous, ces promesses immondes... /Ma surprise s'abrège, et mes yeux sont ouverts.

菱山：この渦のかずかずを、この穢れた望みのかずかずを呼び戻せ……／私の驚異も短くなり 私の眼も開かれてゐる。

田辺：この逆潮を呼返せ、この邪淫の約束を破棄せよ。わが驚は短縮せられてわが眼は開く。

矢内原：そのさかまく波を、その穢らしい誓約を撤回せよ…… 私の驚きは約められ、そして私の眼は開いてゐる。

鈴木：その渦巻、その穢らしき誓約を 召還せよ……／わが驚異は圧縮されて、わが眼はつひに開かれたり。

平井：その渦流、その汚れた約束を取り戻すがいい……／おどろきの想いはおさまり、私の眼はついに開いた。

井沢：この渦を、この淫らなる約束を召し還すべし……／今しわが驚異つづまり、双の眼はひらかれてあり。

中井：あの渦、このとぐろも——卑しい約束も振り出しに戻せよ……／今、驚きは収まって私は眼を開いた。

64-65

Je n'attendais pas moins de mes riches déserts /Qu'un tel enfantement de fureur et de tresse:

菱山：私は、かずかずの私の豊かな曠野から／このやうな狂気と蛇身の生れることのみ、期待してゐた。

田辺：われはわが豊なる曠野よりかかる狂乱と編毛の如き蛇身との、かくばかりに産まれ出づるを待ちき。

矢内原：私の豊かな沙漠からこのやうな激情と縋れとが生れることくらゐは期待してゐた。

鈴木：わが豊沃なる沙漠より、狂気と蛇体の編毛との／斯の如くに 生れ来るを 予期せざるには非ざりき。

平井：私は豪華なわが心の砂漠から、まさしく／真田紐に似た怒りの蛇体が生れ出るのを待ち受けていた。

井沢：さはれわれは予期せざるには非ざりき、わが豊沃の／沙漠より、かかる^{もつれ}編毛と激情の生れ出づるを。

中井：果して豊かなわが砂漠には／絡み合ふ髪の毛と狂気とが生まれてゐた。

66-67

Leurs fonds passionnés brillent de sécheresse /Si loin que je m'avance et m'altère pour voir

菱山：私の曠野の烈しい地肌ば、荒涼として耀く／私が突き進み、思ひ悩む私の地獄のかずかずの、望みない^{さかひ}限界を見守るために

田辺：曠野の地底は激して、わが進み行く限り、しかしてわれわが悲しげなる地獄の果てなき限界を見んがため

矢内原：この沙漠の激情をおびた深みは乾燥に遥かに輝きわたり、その遥けさの故に私は進んで行き、思ひにみちた私の地獄の望みの絶える果を見ようとして、

鈴木：思考するわが地獄の 希望もなきその境界を 見むために／われは進みて、自らを変質する限り 遥かに遠く

平井：情熱の砂漠の奥ははるかに干からびてかがやき、／そこを私はすすみゆき、^{かつ}渴えている

井沢：情熱に燃ゆる地肌は遥けくも乾燥に輝れば、／もの思ふわれが地獄の、望み絶ゆる涯をば見んと、

中井：感情の岩盤は乾きに輝いて彼方に至り、／わが思考地獄の絶望の限界を眺めやうと、

68-69

De mes enfers pensifs les confins sans espoir... /Je suis... Ma lassitude est parfois un théâtre.

菱山：自らを変へてゆく程遠くまで……／私は知る……私の倦怠は時としてひとつの劇場となることを。

田辺：われを変性する限り、そは乾燥に燃ゆ。われは知れり、わが倦怠は往々劇場となるを。

矢内原：咽喉をかわかすのだ…… 私は知つてゐる…… 私の倦怠は時として一つの劇場であることを。

鈴木：情熱炎ゆるその土壤は 乾燥し果てて輝きわたる……／われは知る……わが倦怠は 時をり一つの劇場なりと。

平井：望みないわが想念の奈落の果てを見ようとして……／私ば知っている……わが倦怠は時として一つの芝居小屋である。

井沢：われは進みゆきつつ、さてはわれならぬ者とさま変ふ。／われは知る……わが倦怠はをりふしに一個の劇場。

中井：私は進み、渴き、変る……／さう……わが^{けだい}倦怠は時に劇場である。

70-71

L'esprit n'est pas si pur que jamais idolâtre /Sa fougue solitaire aux élans de flambeau

菱山：燃え上る炬火の炎を常にいつくしむその孤高の激しさが／その物憂い墓穴の壁を遠ざけられない程

田辺：梢神は、その孤独なる激昂が炬火の燃えあがるに熱狂して、それが暗鬱なる墳墓の壁を払ひ除かざるまでに、

矢内原：炬火の炎のやうに激しい精神の孤独ないきほひが、偶像を崇めて、その暗い墳墓の壁を決して追ひやらないほど、

鈴木：精神の孤独に於ける激情は、偶像礼拝の愚には陥らね、／松明の焰の如くに燃えさかり、その陰鬱なる墓の壁を

平井：精神は曾つて偶像崇拜に陥ったことはないとはいえ／燃えさかる松明のようなその孤独な昂りが、
井沢：精神もしかく至純のものならず、炬火と燃え立つ／孤独なるかれが激昂、偶像をときに崇めて
中井：精神も極めては浄らかならず、時に偶像崇めに堕ちて、／孤独な怒りに燃える松明を投げつつ、
72-73

Ne fasse fuir les murs de son morne tombeau. /Tout peut naître ici-bas d'une attente infinie.

菱山：精神も純粹なものではない。／一切はこの下で無限の期待から生じることが出来る。

田辺：純粹なることはあらず。一切はここ下界にては、無限に忍び待つことより生ずるを得るなり。

矢内原：それほど精神は純粹なものではない。この世では、無限の期待からは何でも生れ得る。

鈴木：破らぬほどに 純粹に聖靈的には非ざるなり。／この地下に、一切は 無限の期待より生るを得る。

平井：陰気な墓窟の仕切壁を押し開くまでには純粹ではない。／ここでは、一切がかぎりない期待から生れ出る。

井沢：そが暗き墳墓の壁を追ひやらぬその如くには。／この世では、なべては無限の待期より生れうるなり。

中井：己を閉ざす暗い墓穴の壁を払はうとするではないか。／果てしない待ち続けが作らないものはこの世にない。

74-75

L'ombre même le cède à certaine agonie, /L'âme avare s'entr'ouvre, et du monstre s'émeut

菱山：暗影ぞのものも精神を烈しい苦痛へ引き渡し、／やぶさかな魂も半ば口を開き、

田辺：影（幽霊）さへもある苦痛には負く。魂は熱心にみづからを開放す。

矢内原：影さへも或る苦悶には屈し、吝かな魂も纔かにその扉を開く、

鈴木：亡霊さへも官能の苦痛に負けて身を譲り、／貪婪極まる靈魂も、半ばその扉を開き、怪物の

平井：：亡霊さへもある種の苦しみには負けてしまい、／貪婪な魂は半ば身をひらいて、胸をときめかすのだ、

井沢：亡霊の身もなにかしの苦悶にはおのれを屈し、／吝き魂も半ば身をあき、燃ゆる戸の敷居のうへに

中井：この世はもとより、黄泉の子も怯む末期の苦しみがある。／もの溜めるばかりの魂も殻を微かに開いて、

76-77

Qui se tord sur le pas d'une porte de feu... /Mais, pour capricieux et prompt que tu paraisses,

菱山：火の戸の敷居に伏し転ぶ怪物に惑乱する……／しかし気紛れに素速くお前はあらはれる、爬虫類よ、

田辺：しかして火の門の階段に身を振る怪物に感動し哀を催す。されど蛇よ、汝いかに移り氣に素早く見ゆるとも、

矢内原：そして火の扉の入口にとぐろを巻いてゐる怪物に心動くのだ……しかし、いかにお前が移り氣にまた敏捷に見えようとも、

鈴木：火の焰ゆる戸口の闕に 身をくねらせて悶える様に感動す……／さりながら、気まぐれにまた敏捷に汝が現れ出づるにせよ、

平井：炎と燃える意識の入口にのたうち廻る怪蛇の姿に……／けれどもたとえいかにお前が気まぐれで素早く見えても、

井沢：身を振るかの怪物にわれとわが心うごかす。／さはれいかに気紛れに、はた敏捷に、汝みえんとも、

中井：火の戸口の踏板の上に身を振る怪蛇に感動する……／だが、身のこなし素早く、気まぐれに見える貴様も、

78-79

Reptile, ô vifs détours tout courus de caresses, /Si proche impatience et si lourde langueur,

菱山：おお 愛撫の駆けめぐる生々しい迂路のかずかず、／まことに差し迫つた焦慮、また重苦しい物憂さ、

田辺：おお、愛撫を渴望する盛なる屈曲、かくも迫れる焦慮、かくも重き無気力、をもつてしては、

矢内原：蛇よ、全身に愛撫の走る激しいうねりよ、かくもさし迫つた焦躁、かくも重い倦怠よ、

鈴木：おお爬虫類 肉体の隅まで愛撫の駆けめぐる生きたる迂曲よ、／かくも身近く迫りたる焦燥と、重苦しき倦怠よ、

平井：蛇よ、総身に愛撫のつたう生き生きとしたうねりよ、／かくも痛切な焦躁とかくも重苦しい倦怠よ、

井沢：^{くちなは}爬虫類よ、おお身あまねく愛撫はしる生くる^{うねり}屈曲よ、／かくも身に逼れる焦慮、はたかくも重き気だるさ、

中井：蛇め、貴様の生命漲るうねりの上を愛撫が一走りに走らうとも、／いかに焦りが身を焦がし、倦怠が身に重からうとも、

80-81

Qu'es-tu, près de ma nuit d'éternelle longueur? /Tu regardais dormir ma belle négligence...

菱山：それにしてもお前は何だらう？ 永劫の長さの、私の夜のかたはらで、／お前は眺めてゐた、私の美事^{けだるさ}な怠慢が眠つてゐるのを……

田辺：たとひ永遠の長きに互るわが夜に近づくも、汝何ぞ拮抗することを得んや。汝はわが美しきなげやりの、眠に入るを見たり。

矢内原：永遠に続く私の夜に較べれば、一体お前が何なのか。お前は見入つてゐた、私の美しいなほざりの寝姿に……

鈴木：わが永劫の長さ夜の傍に在る 汝は そもそも何者ぞ。／おほどかに眠れるわれの美しき無心を 汝は眺め居たりき……

平井：永劫のながながしいわが夜の側らで、お前は一体何なのか。／お前はうつくしい無心のわが臥姿をみつめていた……

井沢：汝はそも何なるや、わが永遠の夜にくらぶれば？／汝はわが^は美しき^{なほざり}等閑ねむれるを目守りゐたりき……

中井：わが永遠の夜長に較べれば貴様など何程のことがあらう？／見てゐたな、貴様は、眠る私の無防備の美を……

82-83

Mais avec mes périls, je suis d'intelligence, /Plus versatile, ô Thyrse, et plus perfide qu'eux.

菱山：しかし、かすかすの自らの危険と共に、おお 酒神^{アンテリジャンス}バツカスの杖にも似たお前、／私は智慧により、さらに移り気な、危険よりもさらに二心あるもの。

田辺：されどわが危険に臨むも、おお、酒神バツカスの杖に似たる蛇よ、われは知性を具へて、その危険より一層変りやすくまた一層予定しがたきものたるなり。

矢内原：しかし、おおティルスよ、私は私の危険と気脈を通じて居り、その危険よりも更に自在、更に狡猾なのだ。

鈴木：さはれ、今、身に諸々の危険を抱けど、おお酒神の杖なる蛇よ、／われは叡智なり、危険よりも 更に変転極りなく 更に酷薄。

平井：だが数々の危機を秘めて、私は叡智だ、／おお酒神杖^{ティルス}よ、その危機よりもさらに移り気で、さらに不実で。

井沢：さはれ身に危険こそ負へ、われはいま知も慧きもの、／危険よりさらに変幻、おお杖よ、さらに狡猾。

中井：だが私は今、危険を知って、危険と手を結びつつ、知性に拠る者、／危ふさを補って余りある変り身の速さと狡さを持つ私である。

84-85

Fuis-moi! du noir retour reprends le fil visqueux! /Va chercher des yeux clos pour tes danses massives.

菱山：私から遁れよ！ 暗黒の帰路の滑らかに粘る糸筋を立ち帰れ！／鈍重なお前の所作のだめに向う見ずに探りゆけ、

田辺：われを避けよ。暗黒なる屈曲の粘る絲すぢを再びとりて戻れ。汝の重々しき踊のために、閉ぢたる眼もて探り行け。

矢内原：私から逃れよ！ 暗い婦り途の粘る糸を再び辿り行け！ お前の重々しい舞踏を迎へる閉ぢた眼を求め行け。

鈴木：われを遁れよ。闇黒なる帰路の粘液光る糸を辿れ。／鈍重なる汝の舞踏のために、未だ眠れる眼を探せ、

平井：私を避けよ、粘液の糸を曳きながら暗い退路を逃げて行け。／お前の重々しい踊りのために閉ぢした眼を探しに行け。

井沢：われを遁れよ！ かぐろの帰路の粘る糸たどりて帰れ！／汝が重き舞踏のために、閉ざしたる眼を求めゆけ。

中井：私を去れ！ バッカスの杖よ！ 昏い帰り道を粘りの糸を辿って帰れ！／貴様の重い踊りは目を閉ぢた者を探して見せよ。

86-87

Coulez vers d'autres lits tes robes successives, /Couvez sur d'autres cœurs les germes de leur mal,

菱山：次々に波打つお前の衣裳をよその臥床へ向けて流しゆけ、／ほかの者共の内心にそれぞれの悪の芽を植ゑつけよ、

田辺：汝の次々に更はる衣を他の臥床に向ひ流れしめよ、われ以外の他の胸の上に、その悪の胚種を孵化せしめよ、

矢内原：波打つお前の衣を他の臥床へと滑らせ、他の人々の心の上に彼等の悪の芽を育てよ。

鈴木：汝の波うつ衣をうねらせ 他者の臥床に滑り行け、／他者の心に 彼等の悪の萌芽を孵化させよ、

平井：別の臥床に向ってお前の長い裳裾を曳いて行け、／他の人たちの心に悪の胚子を孵せ、

井沢：汝が長きうねる衣を他の床のかたに滑らせ、／われならぬ心のうへに悪の胚を孵し育てて、

中井：貴様のうねる裳裾は別のベッドに寄せよ。／貴様の悪の種は余所の心の苗床で育てよ。

88-89

Et que dans les anneaux de ton rêve animal /Halète jusqu'au jour l'innocence anxieuse!...

菱山：獣にふさはしいお前の夢の輪のなかで／夜明けまで、いたましい無邪気さの息を弾ませよ！……

田辺：しかしてわれは汝の動物的な夢想の環のうちに、不安気なる無邪気さが、昼間まで息を切らせて焦がれ求むることを望む。

矢内原：そして、お前の畜生の夢の輪の中で、不安な無垢の者が夜の明けるまで喘ぐやうに！……

鈴木：而して汝の獣的な夢の幾重に環を為して巻きたる中に、／夜の明くるまで、不安なる無垢の寝息を弾ませよ……

平井：そしてお前の畜生らしい夢の暈輪にかこまれて、／暁方まで無垢な心が不安にあえぐがいい……

井沢：かくて汝が畜生ながらの夢の環のまろきがなかに／不安なる無垢の無心を夜明けまで息あへがせよ！

中井：貴様の動物ふうの夢の環の中でお人好しを捉へて、／昼の訪れまで不安に喘がせてやれ！……

90-91

Moi, je veille. Je sors, pâle et prodigieuse, /Toute humide des pleurs que je n'ai point versés,

菱山：私は、私は、夜をこめて眼覚めてゐる。／つひぞ流さなかつた涙に濡れつくして

田辺：さてわれは、われは夜も眠らずに醒めたり。いまわれは蒼ざめながら人眼をそばだつ様子にて、未だ流せしことなきほどの涙にまったく濡れはてつつ、

矢内原：私、この私は眼覚めてゐる。私は自分の流したのではない涙に濡れそぼり、

鈴木：われは眠らず、目覚めたり。色蒼ざめて 異常にも／つひに涙は流さねど 身は泣き濡れて、

平井：私は眠らずにいる。私は、蒼ざめて、面変わりして、／流した覚えもない涙にしとどに濡れて、

井沢：このわれは眼あきたり。蒼ざむれ、いと目覚ましく／われは出づ、つひに涙は流さねど身は泣き濡れて、

中井：私は夜を籠めて目覚め、よしんば血の色薄くとも／なほ奇跡の如く、己の注がなかつた涙に濡れそぼちつつ、

92-93

D'une absence aux contours de mortelle bercés /Par soi seule... Et brisant une tombe sereine,

菱山：私は立ち出でる、蒼褪めながら眼覚ましく、／ひとり我が身によつて揺すられた女人にふさはしい周辺の不在から……／さうして物滞かな墓石を破つて、

田辺：ただわが身によつて揺すられたる女身の外形に対する内実の不在より出で行く。かくてわれは、清澄なる墓石を砕きて

矢内原：ただ己のみにあやされる人型の不在の中から、蒼ざめて見事に立ちいでる……そして清らかな墓を打破り、

鈴木：自己のみに揺られて成りし、女性なる輪郭の不在より／われは脱出す…… かくて 清澄なる墓を 破りて

平井：孤りわれとわが身に揺りあやされた生身^{いきみ}の女の形をもった／不在から抜け出す……そして静かな墓窟を破って、

井沢：自己のみによって揺さるうつしみの女人の輪郭^{かた}の／不在^{うつろ}より……かくてやわれは静やかな墓うち毀ち、

中井：揺れる女体のさまざまな輪郭が作る「不在」から脱け出る……／私は透明な墓を破壊し、這ひ出でて
94-95

Je m'accoude inquiète et pourtant souveraine, /Tant de mes visions parmi la nuit et l'œil,

菱山：私は肱をつく、不安ながらしかし無上に気高く、／夜と眼のなかにありあまる幻を浮べて

田辺：気づかはしげにしかも昂然と肱をつき、夜と眼とのなかにかくも多くのわが幻影を湛ふ。

矢内原：私は肱をつく、不安に、しかも昂然と。それほどに、夜と眼との間の幻の

鈴木：われは、不安なれども 驕慢に 肱を突きつつ冥想す、／かくまで、夜とわが眼との間にありて、わが幻想の

平井：私は不安にみちて、しかも昂然と肱をついている、／夜とわが眼の間はおびただしい幻影にみちあふれて、

井沢：肱をつく、不安にみちて、さりながらいと昂然と。／かくまでに、夜と眼とのあはひなるわが視像^{まぼろし}の

中井：胸騒ぎしつつも最高の矜持に昂然と肘を突く。／眼と夜とのあはひに溢れる数多のわが幻は
96

Les moindres mouvements consultent mon orgueil.》

菱山：いま、かすかな動揺さへ私の矜持を窺ふ。

田辺：最もかすかなる運動さへも、わが誇を傷けざるやうにと気を配る。」

矢内原：ごく僅かな動きも私の矜持に諮るのだ》

鈴木：極微なる動揺は わが矜持に敢へて諮るなり。

平井：いささかのさゆらぎも私の自負心に問い迫るのだ。

井沢：はつかなる揺ぎ^{さゆら}さへもこれやわが矜持に諮る。

中井：微かに動く時にも先づ私の誇りに諮り、許しを請ふ」

〔四〕

97-98

Mais je tremblais de perdre une douleur divine! /Je baisais sur ma main cette morsure fine,

菱山：しかし、この世のものとも思はれぬ苦痛を失ふことを、私は懼れ、身慄ひしてゐた！／己が手の上に、このかすかな噛み傷に口吻けながら、

田辺：「かへつてわれは、神聖なる悲哀を失はんとするにをのく。われはわが手にこの妙なる傷^{くちづけ}を接吻す。

矢内原：しかし私は戦き怖れてゐた、神々しい苦痛を失ふことを！ 私の手の上のかすかな咬み傷に私はくちづけてゐた。

鈴木：去りながら、神性の痛みを失ふかと われは戦き居たり。／わが手の上の 繊細なるこの咬傷に接吻し、

平井：だが私は神聖な苦しみを失うのかとおののいていた。／私はわが手のうつくしい傷口に接吻し、

井沢：さはれこの尊き痛み失せなんをわれは恐れぬき！／手のうへに微妙の傷にわれひと口づけしつつ、

中井：だが私は神のごとき痛みを喪ふかと戦いてゐた！／己が手の微かな噛み傷に口づけしたが、
99-100

Et je ne savais plus de mon antique corps /Insensible, qu'un feu qui brûlait sur mes bords:

菱山：私はもはや、私の周辺に燃える火のほかは、／昔日の私の非情の肉体を知らなかった。

田辺：かくてもはやわが旧き無感覚なる肉体の中、わが知るものは、わが身体^{からだ}の周辺に燃ゆる火のみ。」

矢内原：そして私はもはや感ぜられぬ昔の身体については知らなかった、私のほとりに燃えさかる火のほかは。

鈴木：わが周辺に燃えさかりし火焰の外は、昔日の／感覚鈍き肉体に関して われは知らざりき。

平井：もはや以前の不感の肉体については、／わが肉の周縁に燃える炎より他に覚えはなかった。

井沢：われはもはや不感無覚の昨日のわが^{きぞ}軀^{むくろ}につきて／識らざりき、わが周辺に燃えさかる炎のほかは。

中井：かつての感動しなかった身体はもはやわれ知らぬものとなって、／残るは私の境に燃え盛る火だけとなった。

101

Adieu, pensai-je, MOI, mortelle sœur, mensonge...

菱山：私は思考してゐた、おさらばだ、私よ、死すべき妹^{はらから}よ、虚妄よ……

田辺：「われは思へり、いざさらば、われよ、死すべき姉妹よ、いつはりの影よ……。」

矢内原：私は考へた、さらば、我よ、死すべき妹よ、虚妄よ、と……

鈴木：その時われは思考せり、告別す、『自己』よ、死すべき妹よ、虚妄よ……

平井：私は思った、さようなら、自我、死すべき妹、虚しい像よと……

井沢：さらば、われよ、われは思ひぬ、虚妄よ、死すべき妹よ……

中井：私は思った、さやうなら「われ」、生ま身の妹、偽り……

(I) 終わり